エ　下側隣接チャネル漏えい電力（P_L）の測定

㋐　スペクトル分析器の設定を２⑵とし、送信周波数帯域下端から－2.5MHzを中心周波数にして掃引する。

㋑　全データ点の値をコンピュータの配列変数に取り込む。

㋒　全データについて、データ点ごとにdB値を電力次元の真数に変換する。

㋓　真数に変換したデータについて、3.84MHzのＲＲＣフィルタ（ロールオフ率0.22）の特性により各データを補正する。

㋔　全データの電力総和をイ㋓の式で求め、P_cをP_Lと読み替える。

㋕　スペクトル分析器の設定を２⑵とし、送信周波数帯域下端から－7.5MHzを中心周波数にして掃引し、終了後㋑から㋔までの手順を繰り返す。

オ　割当周波数の下限周波数と上限周波数測定の場合

㋐　信号発生器１を送信周波数帯域内の割当周波数で最も高い周波数とし、信号発生器２からｎまでをオフとする。試験機器の出力が最大になるように設定し、イ及びウの測定を行う。

㋑　信号発生器１を送信周波数帯域内の割当周波数で最も低い周波数とし、信号発生器２からｎまでをオフとする。試験機器の出力が最大になるように設定し、イ及びエの測定を行う。

カ　複数の空中線端子を有する場合は、それぞれの空中線端子において測定する。

⑵　800MHz帯における１MHz及び100kHz帯域幅当たりの隣接チャネル漏えい電力の測定

ア　複数割当周波数測定の場合

⑴アに同じ。

イ　上側隣接チャネル漏えい電力（P_U）の測定

㋐　スペクトル分析器の設定を２⑶とし、送信周波数帯域上端から＋10MHzまでを掃引周波数幅として掃引し、隣接チャネル漏えい電力の最大値を探索する。ただし、分解能帯域幅の設定値が異なる領域を含む場合はそれぞれの領域において掃引し、それぞれの隣接チャネル漏えい電力の最大値を探索する。

㋑　探索した隣接チャネル漏えい電力の最大値が許容値以下の場合は、探索値を測定値とする。

㋒　探索した隣接チャネル漏えい電力の最大値が許容値を超えた場合は、スペクトル分析器を２⑷のように設定し、中心周波数を㋐で探索された周波数とし、掃引終了後、全データ点をコンピュータに取り込む。

㋓　データ点ごとに電力次元の真数に変換し平均電力を求め、それをdBm値に変換し、これをP_Uとする。

ウ　下側隣接チャネル漏えい電力（P_L）の測定

㋐　スペクトル分析器の設定を２⑶とし、「送信周波数帯域下端から－10MHz」から「送信周波数帯域下端」までを掃引周波数幅として掃引し、隣接チャネル漏えい電力の最大値を探索する。ただし、分解能帯域幅の設定値が異なる領域を含む場合はそれぞれの領域において掃引し、それぞれの隣接チャネル漏えい電力の最大値を探索する。

㋑　探索した隣接チャネル漏えい電力の最大値が許容値以下の場合は、探索値を測定値とする。

㋒　探索した隣接チャネル漏えい電力の最大値が許容値を超えた場合は、スペクトル分析器を２⑷のように設定し、中心周波数を㋐で探索された周波数とし、掃引終了後、全データ点をコンピュータに取り込む。

㋓　データ点ごとに電力次元の真数に変換し平均電力を求め、それをdBm値に変換し、これをP_Lとする。

エ　割当周波数の下限周波数と上限周波数測定の場合

㋐　信号発生器１を送信周波数帯域内の割当周波数で最も高い周波数とし、信号発生器２からｎまでをオフとする。試験機器の出力が最大になるように設定し、イの測定を行う。

㋑　信号発生器１を送信周波数帯域内の割当周波数で最も低い周波数とし、信号発生器２からｎまでをオフとする。試験機器の出力が最大になるように設定し、ウの測定を行う。

オ　複数の空中線端子を有する場合は、それぞれの空中線端子において測定する。

⑶　２GHz帯における１MHz帯域幅当たりの隣接チャネル漏えい電力の測定

ア　複数割当周波数測定の場合

⑴アに同じ。

イ　スペクトル分析器の設定を２⑸の探索時とし、各掃引周波数幅ごとに隣接チャネル漏えい電力を探索する。

ウ　探索した漏えい電力の（振幅最大となる測定値＋分解能帯域幅換算値㊟）が許容値以下の場合は、(振幅最大となる測定値＋分解能帯域幅換算値）を測定値とする。

注　分解能帯域幅換算値＝10log（参照帯域幅／測定時の分解能帯域幅）

分解能帯域幅換算値：15.2dB

エ　探索した漏えい電力の（振幅最大となる測定値＋分解能帯域幅換算値）が許容値を超える場合は、オからクまでの手順で詳細測定を行う。

オ　スペクトル分析器の設定は２⑸に同じ。

カ　スペクトル分析器を掃引して、全データ点の値をコンピュータの配列変数に取り込む。

キ　全データについて、dB値を電力次元の真数に変換する。

ク　全データの電力総和を次の式で求める。ただし、バースト波の場合は、計算で得られた測定値にバースト周期を電波を発射している時間で除した値を乗じて補正した値を測定結果とすること。

$$P_s=\left(\sum_{i=1}^{n}E_i\right)\times\frac{S_w}{RBW\times k\times n}$$

P_s　：各周波数での参照帯域幅内の電力総和の測定値（W）

E_i　：１サンプルの測定値（W）

S_w　：掃引周波数幅（MHz）

ｎ　：参照帯域幅内のサンプル点数

ｋ　：等価雑音帯域幅の補正値

ＲＢＷ：分解能帯域幅（MHz）

ケ　割当周波数の下限周波数と上限周波数測定の場合

㋐　信号発生器１を送信周波数帯域内の割当周波数で最も高い周波数とし、信号発生器２からｎまでをオフとする。試験機器の出力が最大になるように設定し、イからクまでの測定を行う。この場合において、スペクトル分析器の中心周波数の設定は、送信周波数帯域上端＋2.5MHz及び送信周波数帯域上端＋7.5MHzとする。

㋑　信号発生器１を送信周波数帯域内の割当周波数で最も低い周波数とし、信号発生器２からｎまでをオフとする。試験機器の出力が最大になるように設定し、イからクまでの測定を行う。この場合において、スペクトル分析器の中心周波数の設定は、送信周波数帯域下端－2.5MHz及び送信周波数帯域下端－7.5MHzとする。

コ　複数の空中線端子を有する場合は、それぞれの空中線端子において測定する。